

月別アーカイブ【2010年11月】

言葉より行動

2010年11月30日

地元の会合に出席。

帰り際、一人の奥様が不安そうに「子どもたちが防府で就職できるかねえ。一緒に住んでくれたらええねえ。そうならんと私ら介護してくれるもんもおらんよ。」とお話される。

「だって、防府景気悪いじゃろ。企業はなくなるし、土地代も下がって、介護や子育ての支援も、全然変わらんよね。」

たしかに、企業の撤退は相次ぎ、進出はゼロである。

今、防府のすべてのパイが縮んでいる。

ご家庭の奥様が不安を抱いている。

この不安を防府市執行部・議員の方々にわかってもらいたいとの切なる声が聞こえますか？

今、「言葉より行動」の時。

認可外保育所に補助金

2010年11月29日

政府の待機児童特命チームは、200億円を投じて、認可外保育所への補助や待機児童解消に取り組むことが報じられた。

「国の最低基準を満たしている認可外保育所に補助をする。」とのことだが、この報道だけでは一般的にわからないこと、誤解を受けそうなところがある。

「最低基準」という文言である。

これは決して「最高基準」ではないということであり、しかも日本の子どもたちにかけている国の費用は、諸外国と比べて、低い。サミットに参加している国では最低なのである。

最低の費用の最低基準で日本の認可保育所は運営されている。北欧に比べ、職員数、クラスルームや設備などは、雲泥の差があることをみなさん御存知でしょうか？

職員処遇や食育も含め、厳しい予算の壁がありながらも、懸命に子育ての支援に一丸となって取り組んでいることも知ってほしい。

もとより、子どもたちだけのことでなく、障害、老人、介護など社会福祉関係は、ボランティア精神に依存してきた傾向がわが国にはある。

ここから、脱却しなければ、根本的に社会保障は解決しないのである。
政権交代で一番期待したことは、抜本的改革であり、小手先の対症療法ではないのだが。

おりしも、山口、下関市で保育園児に関わる悲惨な事件が起きた。とてもよく知っている副園長先生がテレビで涙ながらに思いを述べておられた。

子どもたちの暮らしている現状にもっと理解を示す政策を現場は求めている。

長谷川穂積

2010年11月28日

神戸子ども総合学院に、講義に行く。昨日は深夜まで、友人宅で過ごしたこともあり、三時間ぶつとうしのしゃべりは、なかなか大変だったが、次第に調子があがりしっかりと役目を果たすことができた。

実際講義は、幼稚園、保育園、小学校、養護学校の先生など、いろんな職種の方が出席されており、私自身も相当勉強になる。

質問も現実的なものが多く、少しでも子どもたちとの関わりが良くなるよう、休日返上で研修に来られている。その姿は、自分も逆に励みになるのだ。

今年度最後の講義を無事終え、新神戸駅に。

新幹線に乗り込もうとすると、降りてきたのはあの長谷川穂積。間違いない。二日前、二階級上のクラスに挑み、敗戦を乗り越え、母の死を乗り越え、見事、新世界チャンピオンになったボクシングの長谷川穂積選手である。

目の上の痛々しい絆創膏が目立ったけれど、プラットホームで、すれ違った様子は、小柄でスウッと風が通り過ぎた感じだ。

ご家族と一緒にいたが、あのテレビから伝わってくる迫力との違い、偉ぶることのない気配にむしろ戸惑いを覚える。

命をかけて戦った人だけがわかる、独特の余韻かもしれない。

きょうは、習うべきことの多い一日。

兄弟わっしょい！

2010年11月27日



裸坊の日である。最近、中関からは、中関小学校 PTA だけであったのだが、今年は陸上自衛隊防府駐屯地の方も参加。

昼ごろ、自坊に来る予定ということであったので、きんこう第二保育園の子ども

たちとっしょにお待ち受け。

「兄弟わっしょい」そしてピッピとなる笛の音とともに神輿が近づいてきた。なかなか迫力満点。中には涙ぐむ子もいたが、中関小学校 PTA の「ピカチュウ神輿」に喜んでた。

ところが、写真撮影の準備をしていると、またピッピと笛の音。自衛隊のヘリコプター神輿もやってきた。

丁度、自坊の境内で、二つの神輿がランデブー。子どもたちも入れると100人以上であふれかえらんばかり。

子どもたちも神輿をバックに写真に撮ってもらい、納得。

二時頃には、きんこうデイサービスに中関小学校 PTA 神輿がやってきた。おじいちゃん、おばあちゃんも大喜び。

「神輿に触らせて！」と一生懸命歩いて行かれる。車いすの方には、手で触れるところまで、神輿をかついでいただき、たいそう喜ばれる。

子どもたちも、おじいちゃんもおばあちゃんも、担ぎ手の若い世代も「みんな笑顔」。

やはり、まちはこれでなくっちゃ！

「笑顔のまちづくり」その原点は「兄弟わっしょい！」かも。

名古屋市長辞任

2010年11月26日

リコール請求が不発に終わりそうな名古屋市長。減税、市長給与半額、市議定数半減、いろいろな課題を掲げて、マスコミに登場しては、センセーショナルな言動。

そして、辞任表明。

市長給与減額は実施したが、他は暗礁に乗り上げた結果である。防府市長選の時に現職の応援に来ただけに、注目はしていたが、辞任表明した市長になって名古屋は何か変わっただろうか。

以前は、名古屋といえば、日本全国不況の嵐が吹いていても一人勝ちの状況を呈していたがののだが。今は、いい話は伝わってこない。

防府は市長給与半減は未だ実施せず。市議定数のことだけが取りざたされている。

どちらもの市も、未来デザインがみえないのは同じだが、高度成長期から成熟した社会になりつつも陰りを見せ始めた現在、少しは「夢・未来」を語り、実現しようとする政治を望むことはいけないことであろうか。

私たちは限りある命の時間を生きている。「より良い社会」になることを、具体的に提示し、そこに努めてこそ政治ではないのか。

もっとも、この国の未来デザインを見せただけの政権交代になりつつあることも事実だが。

政治離れが加速しないことを念ずるばかりである。

国づくり

2010年11月25日

「まちづくり」はコンセプトが大事である。私自身「まちづくりは人づくり」として青年会議所時代から薫陶を受けた先生のもと、行動してきた。

この度の市長選もその流れであった。

しかし、今になってあらためて見直すと、アメリカとの関係が微妙になるやすかさず中国、ロシアが変化を見せ、そして北朝鮮のあり得ない砲撃事件である。

自国の「こと」、「国の中心線」をしっかりしないと、あっという間に築き上げてきたものがガタガタになる。

前々からの、持論ではあるが、この国は「教育・福祉」に関し国家戦略がなかった。それは行き当たりばったり、出たとこ勝負のスタイルのようでもあったが、厳しい時代をくぐりぬけてきた、身体でその時代を通り抜けた世代には、独特の培われた経験があった。それが、この国の危機を未然に防ぎ、成長を成し遂げてきたのであろう。「まちづくり」の前提に「国づくり」があったとことをどこかに置き忘れていたのではあるまいか。

成熟社会に足を踏み入れた我が国は、今こそ国家戦略として、教育、福祉を充実させ、その上に確固たる経済基盤を築けるチャンスだと思うのだが。

今こそ、与野党、官僚一体となり、内外ともに押し寄せる「危機」を打破することが政治の役目ではなからうか。

「光の道」の続編。一昨日総務省光の道構想は大臣が変わったこともあり、後退へ。孫正義社長激怒と報道される。

しかし、これは山口県にとって最大のチャンスではなからうか。

国が方向性を示せないなら、かつて、明治の時代から戦略性を持って、国の予算の再配分を増やそうとしてきた我が県である。

今一度、今度は大企業と戦略性を持って手をつなぎ、未来への道「光の道」モデル県構想もあってもよいのではと考える。

国宝・毛利博物館

2010年11月24日



東京、青山、子どもの城での会議を済ませ、トンボ帰りのように午後1便で山口に。

機内で手にしたANA機内情報誌「翼の王国」に防府のことが掲載されているのを発見。内容は、毛利博物館の国宝のことである。

記事を引用すると

～戦国時代に名を馳せ、幕末、明治維新に道を開いた毛利家の遺構は、山口県は防府市にございます。これは広大な名園を従え、どっしりと構える大正期の和風建築の傑作、その建物がそのまま『毛利博物館』となっております。

この毛利博物館に、国宝にも指定されております雪舟作「四季山水図巻」、通称「山水長巻」があり、毎年11月に展示公開されております。特に本年は大手プリンターメーカーが雪舟に挑み、「山水長巻」を再現・複製した成果を同時に展示とのこと。興味深い、雪舟と最先端技術との戦いが観戦できるとか。～
水墨画「雪舟と雪村」編 菊池 理 さんの文章の一部である。

「防府の歴史、最先端技術を駆使した未来」が見事に全国PRしてある。

私だけかもしれないが、このような内容の展示がしてあることを、あまりにも防府市はアピールしていないのではないだろうか。

チャンスを活かそうではないか。民間がPRしてくれているチャンスを活かそうではないか。財源がないなら、なぜこんなチャンスをもっとアピールしないのだろうか。

残念。ちなみに展示期間は11月いっぱいだそうである。

山口宇部空港に着くと、「ドアを開けると山口宇部の気持ちよい風が入ってまいりました。」と、いつものお決まりのアナウンスとは違うメッセージに、いっぺんに心がさわやかになる。

服を着替え、午後6時からの「ほうふ日報」1万号記念パーティに出席。この市のおかれている経済状況の厳しさ、その現状認識のない、あまりにも美辞麗句のみの挨拶もあり、あきれ。総理大臣であればマスコミにより厳しい指摘があすの朝刊に載るのだろう。

途中退席し、コール「唯可」(ゆいか)の忘年会に。以前から決まっていたのであるが、お一人お一人から、歌によって、支えられている心のありようをお聞きする。

みんなで「えがお」の今年最初の忘年会でした

ナイトフライト

2010年11月23日

勤労感謝の日。

日中の行事を済ませ、夕方からパーティーに。パーティーといっても、カントリーありロックありのアマチュアバンドの演奏会である。

昨年も出席したのだが、今年は一段とパワーアップしてエネルギッシュであった。

何といっても、オープニングがなぜか民謡。結構意表をつかれた。

ありがたいことに挨拶の場を頂戴する。テンションをあげて、目一杯の思いを伝えると、大きな拍手にホッと一息。ただ、残念ながら最後まで聞くことができず、空港に。

内閣府、子ども、子育て新システムのワーキングチームの事前研修の為、急きょ最終便で東京に。

機内では偶然にも高村正彦先生と臨席になる。お昼にもお会いしたのだが、先生もエネルギッシュだ。

私も、まげずに「前へ」「前へ」

失言

2010年11月22日

政治家の失言は、枚挙にいとまがない。むしろ政治家だからこそ、失言を取りざたされる。そのことを、国レベルでは、野党、時には与党、そしてマスコミも厳しく追及する。

しかし、地方においてそのチェック機能は働いているか？少なくとも、議会が傍聴席だけで、一般的に公開されていない地方議会は危ないのではないか？

主権在民の基本原則の一つに、情報が公開されること。そして判断材料が市民に届いているかどうかは大きな問題である。

この度の法相辞任、街頭インタビューでは、多くの方が、持論をはっきりと述べている。かなりの方が確信を持って「辞任遅し」と明言。

しかし、地方の出来事について、あそこまではっきりと述べることができる方が何人いるだろうか？また、地域のしぐらみや人間関係で「明言」することは難しいのが実情ではないのか？

ここに、的確に切り込む議員やマスコミの責務は大であるとあらためて感じる。

法務大臣辞任の後釜は官房長官兼任とのこと。「暴力装置」と自衛隊のことを言った方が法務大臣兼任。その報道を聞き唖然とする。自衛隊の方々の思いは、言葉にはされないが、歯がゆい思いがあるときと思う。

この国の為政者は、何をしたいのか、の前に、本当にこの国を守る、そして発展さすという覚悟はないのだろうか。

「失言」だけではすまない方向に向かっていることが不安である。

光の道

2010年11月21日

総務省「光の道構想」にソフトバンクが提言を行っている。

全国の光ファイバー網を整備し、経済、社会、生活に劇的変化をもたらし、新しいライフスタイルを作っていこうというものである。

ソフトバンクはこれに関し、A案B案の二つの案を示して、地方の活性化を含む、成長戦略を世に問うている。

昨日、シアトルの友人から、その「光の道」構想についてメールが届く。

彼は、20代前半、30代半ばの孫正義社長と仕事上の関係があったのだが、遠くシアトルから山口県への提言をしてくれたのだ。

「山口県のようにスーパーハイウェイ構想で光の道のようなインフラがある地方には、そのインフラ上での新しいビジネス起業、教育改革、医療改革というインフラ完成の一步先の事業も平行して考えるとよいと思う。」という内容を首相官邸サイトに投稿したことを伝えてくれた。

そういえば山口県は数年前にスーパーハイウェイ構想実施をし、光ファイバーのような高速ネットワークを整備しているのだ。

「これだけインフラに恵まれている地方が、どうして政治経済で低迷しているのか？」

「ソフトバンクの孫さんに直談判、直訴して、モデル地方にするくらいをぶちあげてはどうでしょうか？」と彼は続けてメールに書いてくれた。

「光の道構想 モデル県」「光の道構想モデル地域」「光の道構想 モデルシティ」など、すでに整備されたインフラを最大限活用すれば、地方の活性化、山口県の活性化も可能ではなからうか？

どうぞ、このブログを読んでいただいている皆様。具体的に生活がよりよくなる道に、知恵、行動力を貸していただけませんか？

もし、実施に向かうことができれば、彼のような優秀でふるさとに思いを持つ人材がUターンしやすくなる地方になると痛切に思うのです。

すでに、関係者の皆様が、この方向で動かれているのであれば、悪しからず。

後援会

2010年11月20日

「人柄も大事だけれど、厚かましきもある。」

「いや人柄が大事。」

「福祉、介護、教育をやってきた人が政治の中心に。」

「はったりもある。できんことでも大風呂敷を広げてやらんと選挙は勝てん。」

「できんかったらあやまつたらええのに。ようあやまりもせんで、できんことをまだやるやる言いよる。」(昨年衆議院選民主党マニフェストのことか?)

「防府はこの市長選が終わってようになったか?」

久しぶりにお会いした後援会の方々との会話。

最後の「防府はようになったか?」の一言にすべてが言い表されているようだ。

結論として、市長選のマニフェストが、今後の政治活動の原点になるということに。

議員定数半減と署名簿提出

2010年11月19日

きょう、議員定数半減を求める約39,000人ほどの署名簿が提出された。

これから、確かな署名かそうでないか精査されるであろうから、実際はもっと減るだろう。

「5万人を超える、防府市民の過半数の署名をとる。」と、代表は述べておられたが、目標とはかなり落差があった。

もとより、そのための署名活動ではなかったのか。

最初は、市議会解散をも辞さないリコールを目指したのだが、いつの間にか有権者の50分の1以上の署名で市長が提案できる「直接請求」に変わっていた。その変容は実に不思議で奇異であった。

しかし、今日の数字を見れば、リコールに持っていくほどの数を集める自信がなかったということである。あえて、「50分の1」というハードルを下げた状態でも有権者の過半数にいかなかったことは、とりわけ企業の撤退、土地下落率連続県下最下位などの厳しい経済情勢にある防府市民の思いであろう。

また、わざわざ署名をとる形をとらず現職が作られた「住民投票条例」も防府市にはあるのだが、これも何故使われなかったのか不思議だ。

今はただ、この署名で集められた「個人情報」の的確な管理を願うばかりである。

一昨日のブログに書いたのだが、市長選現職を支持された方の言葉を思い出す。「せっかく議会が否決してくれたのだから・・・」という意見に、今こそ耳を傾ける必要がある。

なお、防府市議会ホームページに「市議会だより」がアップされている。11月1日発行の19号は、表紙をクリックしても入れないのをご存知でしょうか?

表・裏と示してあるところをクリックすると内容に入れるが、今号だけ、なぜ表紙から内容に入れられないのか、これも不思議である。

意図的なものか、技術的なものか、情報公開には最大限配慮してほしい。

ありがとう

2010年11月18日

長年連れ添ったご夫婦の最後の会話「ありがとう」。
その話を聞き、涙が出る。

ご主人様の思いが、ひしひしと伝わる。

「人生は苦なり」

思い通りにいかないのが人生だとわかっているけど、
人の道行きには割り切れなさが残る。

算数のように割り切れるような人生の道行きはないのだろう。
それを、なんとか割り切ろうとし、大義名分を求め格好をつけていた。
「ありがとう」の言葉で、すべてが割り切れるような人生を目標にしたい。

「島田君、新天地は灯が消えているが、どうしたらええかねえ。」
大先輩から、夜の会合で質問を受ける。
市長選の時、ミニ集会で若い世代から同じ質問を受けたことを思い出す。

防府の経済が悪循環に陥っていることに、世代を超えて、憂いている。

議員定数半減

2010年11月17日

現職市長を支持した方から相談を受ける。
「議員定数半減の署名は、どうしてもできなかった。せっかく市議会が否決してくれたのだから、時間をかけてメリットデメリットをしっかりと伝えてくれればいいのに。いきなり、半減は極端すぎると思う。」

率直に、思いを語って下さったと感じる。
「せっかく市議会が否決してくれたのに・・・」の言葉に
防府に対する慈愛のようなものを感じたのだ。

「いま、やらなければならないことを、考えてほしい。暮らしに関することをとにかくやってほしい。」との思いが募るばかりである。

ブログ

2010年11月16日

子どもと同級生のお母さまから、「ブログ読んでいますよ。」

と、声をかけていただく。

夜、会合の席であったのだが、

内容もよく覚えておられ、恐縮する。

同席しておられた地域の大先輩からも「ホームページある？」と尋ねていただく。

「”島田のりあき”で検索していただくと、すぐにヒットするはずですよ。」とお伝えする。

自分の思いを一人でも多くの方に聞いていただきたいと切に思う。

きょうのように、声をかけてもらおうと勇気がわいてくる。

国、県、市、生活に対する不安感をよく耳にする。下を向いて歩く人が最近多いという方もいる。

昨日の帰りの機内で読んだ雑誌に、「うらやむ」は「裏で病むということ」と、解釈している部分があった。

この解釈は初めて目にしたのだが、表の顔とは異なること、裏側で病むことだけはしたくないと思う。

日帰り

2010年11月15日



東京日帰り。内閣府会議の関係もあり、朝一便で東京へ。

各団体と打ち合わせをし、午後は「子ども・子育て新システム検討会基本制度ワーキングチーム」傍聴。

今回の議題は「放課後児童給付」についてであった。

「放課後児童クラブ」と「放課後子ども教室」の一体化を考えるのか、

それぞれの特徴を活かし、より連携し充実させていくかがポイントであった。

単純に、わかりやすく言うと、厚生労働省と文部科学省の所管との違いである。

年々増加する学童保育に、しっかり対応してほしい思いは、保育所幼稚園労働界

学識経験者、みな思いは同じように感じた。

そういえば、中関小学校の学童保育(放課後児童クラブ)も2年前に、一クラス増え2クラスに。

結果として保護者の方の思いが通じたのだが、より働きやすい環境をつくるにも、

お手伝いした一人として、大変な労力があることもわかったことを覚えている。

今日の会議は、尖閣問題で国会が止まっていることもあり、二人の副大臣も最後まで会議に出席。

国会が止まっているから出席できるというのも不思議な感じもするが、これらの問題は、喫緊の課題であり、スピード感が要求されている。

花みづき会

2010年11月14日



花みづき会に出席。
ご案内の文章が素敵。

「穫れたばかりのお米で作ったお寿司をほうばりながら、年の瀬を控え、この一年を振り返り、ゆったりとしたひとときを歓談でお過ごしただけならと思います。」

場所は「いつもの部屋」

「ほうばりながら」とか「いつもの部屋」とか、わかりやすくてほのぼのする雰囲気。
幼い頃食べた「お寿司」の味。大盛りをペロッとたいらげてしまった。

おじいちゃんから質問もいただく。「あなたのお話は、いいと思うのだが、具体的に話してくれるとよくわかるのだが？」

市長選のことを覚えておいていただき、ありがたかった。

老人ホームのベッド数の比較、乳幼児政策の不足など、具体的にお伝えする。

「こうやって、いろいろなお話しをしていく時間が足りなかったのだ。一方的な伝え方になってしまっていたのだろう。もっと丁寧に具体的にお伝えすること。」

これからの自分のスタイルづくりに参考になったひとときであった。

紅葉

2010年11月13日

今年の紅葉は、実にきれい、鮮やかだ。
同じケヤキにも、紅葉もあれば、黄葉もある。

防府から山口に向かう国道262号線。昨年の災害の爪痕は、
至る所に残っているが、道路に沿って植えられた街路樹の紅葉は、実にきれいだと感じた。

「楓の木」(ふうのき)と、確かそう教えてもらったように思う。

262号線にこの木が植えられる頃、「紅葉がきれいな木ですよ。」

と言ってくれた植木屋さん。

「葉の形も面白いし、ケヤキと一緒に植えてもきれいですよ。」とまで教えてくれたのだが。当時はケヤキしか頭になかった。

あらためて紅葉さかりの262号線の何キロも続く楓の木の堂々たる街路樹を眺めながら、「植えておけばよかったかな?」と、ふと思う。

樹を植えて、二十年近くは経っているであろう。年月がたち、やっとその美しさを味わうことができる。経済も福祉も教育も政治も、的確に種をまいてくれた先人がいて、今があることを思う。

あったかいにおいがする

2010年11月12日

職場訪問実習で中学生が二人、保育園に来園。

玄関を開けて入ってくると、「保育園のにおいがする。」

職員が「保育園のにおいって?」と尋ねると

「あったかいにおい」と答えてくれたそうだ。

その中学生は、きっとあたたかい保育園時代幼年期を過ごしたと思う。

そのあたたかさを忘れないで成長してくれているのだろう。

幼い時の土壌を豊かにしておくこと。幼い時にたっぷり手間ひまかけて育てていくことが、家庭にも保育園にも求められている時代になっている。

国の政策も、この育ちを大事にしてほしい。

大都市の待機児童対策で、育ちの根幹をゆるがさないでいただきたい。

いま、その政策が進められつつあることが不安である。

内閣府会議

2010年11月11日



内閣府子ども子育て新システム検討会議・ワーキングチームの会議に出席。霞ヶ関、中央合同庁舎4号館12階会議室である。

昨年、子育て支援全国大会講師を引き受けて頂いていた当時厚生労働省の村木厚子局長(現・内閣府政策統括官)もほぼ真っ正面の席である。

早速、挨拶に行き、実現できなかった講演を是非一度山口でと、お願いする。

昨年の大会のことをお話しするとよく覚えておられ、素敵な笑顔で残念がられていた。握手をして、再度講演の依頼をする。

会議は、朝、9時30分から12時まで、びっしりの内容。

幼保一体化となった時のため、幼稚園教育要領と保育所保育指針をたたき台に、一つの指針、仮称「こども指針」なるものを造ろうというものである。

内閣府 末松義規副大臣、厚生労働省 小宮山洋子副大臣や政務官、統括官、文科省、厚労省課長、参事官なども出席。

「家庭の教育力」「乳幼児の教育」「子育て支援」を含め、現在生じている子どもに関わる諸問題を解決しようとする意気込みは伝わる。

しかし、都会と地方の現状の違い、国立公立と民間の違い、幼稚園と保育園の目線の違いなど複雑に絡み合い、相当困難な作業である。

この会議の議事録はすべて公開となっていることもあるが、地方で生活している、暮らしをしているものの代表として、現場からの意見を徹底的に訴えていく覚悟である。

何よりも私自身のパワーアップのチャンスであり、山口県防府市もどこかで売り込みたいとも考えている。
乞うご期待！

海上保安庁

2010年11月10日

明日の内閣府の会議のため、夜、東京に。

ホテルに入り、テレビを見ると海上保安庁職員逮捕のニュース。

「ついにここまで来たか！」と思う。

尖閣諸島の事件以来、政府の後手後手の対応は、とうとう最前線で国を守ってくれている現役職員逮捕ということに。

国を守る誇り、その厳しい職務上、自尊心を損なってしまうような政府の対応に、職員はたまらなかったのだろう。

政府高官は、海上保安庁長官の責任を論じているが、何も対応しなかったことに責任はないのであろうか？

最近、責任転嫁、言い逃れに終始しているトップばかりだが、的確な職務を遂行していれば、ロシアの大統領に北方四島に入られることも、海上保安庁職員逮捕もなかったろうに。

トップの責任の取り方が、あいまいになってきたことが、昔と今、この国が、最も変わったところである。

地産地消のお弁当

2010年11月9日



地域の活性化はやはり「人づくり」が原点。

毎年、中浦地区の方々が、安全も兼ねて、いろいろなことを教えて下さる。地区の方々のお昼は、地元で取れた食材でつくられた「地産地消弁当」である。

中浦の米、野菜、魚、向島のひじき等など、メニューを見て頂ければわかる。

お裾わけで頂戴する。

「うまい。味がある。香りがある。心がある。」

中関・玉祖神社に園児が自然観察を兼ね遠足に行く。

皆さんがよく言われる。「中浦には海も山もある。」

これからは「地域の持ち味」を売り出すことで、多くの人に来てもらえるような、子どもたちの学習面にも役に立つような地域の活性化をやっていきたい。

これだけの「地産地消弁当」ができるのは、人が原点。

防府には、切り口を変えれば売り出すところは、まだまだたくさんある。

インセンティブ

2010年11月8日

最近「インセンティブ」という言葉が目につく。夕刻目を通していた内閣府からの議事録にも「インセンティブが働く仕組みを・・・」としっかりと使われていた。

辞書には「やる気を起こさせるような刺激」「奨励金」・・・とあるが。

たしかに、やる気を起こさせないような仕組みの中で、物事を実施していくことは相当困難であるし、うまくいくはずもない。

昨日の、中関小学校音楽会で、未だに脳裏に焼き付いているものがある。男性が指揮をし、男性がピアノを弾く。それも一人の先生ではなく、何人もの先生が入れ替わり立ち替わり。しかも、男性も女性の先生もそれを至極当然のように受けとめているようで、実にフランクにやっているのである。すべてに意欲的なチームワークを感じたのだ。

その雰囲気だから、子どもたちの「のり」もいいはずである。

ここまで「インセンティブ」が働く仕組みをどうやって造り上げたか、知りたいと素直に思う。

反対に、夜のニュースでは、臨時校長研修なるものが、山口県すべての校長先生対象に開かれたとのこと。飲

酒運転がなくならない実態に頭を抱えてのことだろう。

これだけ問題が繰り返されるということは、個人の自覚のありようという限界を超えているのではなかろうか。「やる気を起こさせない仕組み」ができているのはと考えたほうが良い結果が得られるように思う。

現場で活性化しているところもあるだけに、この落差はなんであろう。素敵な現状も伝えてはいかが？

「中関小学校音楽会」&「中関ふるさと祭り」

2010年11月7日



中関地域のふるさと祭りと小学校文化祭と一緒に開催を始めて、10年以上経ったように思う。

今は、小学校音楽会と地域の祭りで、体育館と広いグラウンドがいっぱいになる。

開会式後、1年生から6年生までの演奏・合唱を聞く。最後に惜しくも今年全国大会出場は逃した吹奏楽の演奏があった。

すべての演奏・合唱の素晴らしさとバリエーションの豊富さ、先生と生徒の一体感に感動する。

とりわけ驚いたことは、子どもたちのリズム感のすごさであった。私たちの世代では、ありえないぐらいの研ぎ澄まされたリズム感。

おかげで、この11日に内閣府での幼保一体化・小学校との連携等の会議に出席するが、とてもいいヒントをもらった。

あのリズム感一つをとっても、展示されていた幼稚園保育園の絵画を見ても、小学校との連携は大人が構えずぎて、いい結果につながっていなかったように思う。

学問から入ろうとしすぎていたのである。そこに難しさがあり、構えずぎてしまった。

要は感覚、芸術的な分野からであれば、自然体で幼保と小学校との連携はできていくように感じた。ぜひ会議での発言の参考にしたい。

うどん、おむすびをいただき、最後はトラックの上から「餅まき」をする。閉会後は、テントの片付けを、自治会役員や先生と一緒に手伝い。

汗びっしょりになり、爽快感を満喫。

コンフォートゾーン

2010年11月6日

美術展、文化祭、芸術の秋、真っ盛り。

午後は大道、妙蓮寺様の継職法要に出勤。第16世住職から第17世に。

400年を超えての法灯のご縁。どれほどの多くの方がこれまでに関わられたことか、時の流れからすると、私たちも一瞬である。まして、旬は一瞬かもしれない。

今年のノーベル化学賞を受賞した、米バデュー大学特別教授の根岸英一さんの受賞後の言葉「日本はすごく居心地のいい社会なんでしょうけれど、若者よ、海外に出よ、と言いたい。たとえ海外で成功しなくとも、一定期間、日本を外側からみるという経験は何にもまして重要なはず」を引用し、梅田望夫さんという方が産経新聞に寄稿されていた。

『「居心地のいい」はカンファタブルであるが、米国ビジネス社会ではよく、「コンフォートゾーンを超えよ」という表現が使われる。コンフォートゾーンとは、そこにいれば安心できる慣れ親しんだ場所のことである。

すでにやり方がわかっている分野の通常の仕事において、目標を定め、ひたすら努力を重ね、ギリギリいっぱいまで成果を出すという営みは、たとえそれがどんなに忙しかろうとも「コンフォートゾーンを超える」とは言わない。

既知の分野、今いる場所から、新しい分野、未知の世界に向けて、自ら飛び出す、チームを、組織を引っ張っていく。そんな果敢な挑戦を促す言葉が「コンフォートゾーンを超えよ」なのである。根岸教授の日本の若者たちに向けた言葉には、こういう意味が含まれている。』

さらに、『それを選べばもっと困難になる。より多くのストレスを心にかかえこむことになる。みんなに、おまえは完全に失敗したといわれる時期もおそらくあるだろう。』とまで言及している。

『先が見えない困難ゆえのストレスを抱えながら、慣れ親しんだ世界に留まる人々からの批判を受ける中、成功の保証など何もない世界を疾走しはじめて、大きな果実を得る。』

根岸教授の同じ記者会見で『いざ博士号を取得して日本に帰ってみると、日本には私を受け入れる余地は全くなかった。』とも語ったと文章は続く。

梅田さんの文は最後に、

『「すごく居心地のいい社会」と、この閉鎖性は表裏一体の関係にある。

日本はどれだけ変わっただろうか。いま日本を覆う閉そく感を払しょくするために、私たちが問わなければならないのは「すごく居心地のいい社会」の意味なのではないだろうか。』こう結んであった。

変化を求めるなら、

「コンフォートゾーンを超える」勇気が、私にも防府にも問われている。

カット野菜

2010年11月5日

障害者雇用を積極的に進めている企業を見学。

国産野菜を洗浄、カットして量販店、給食センター、福祉施設に納入していると聞く。

いわゆる「カット野菜」である。

衛生面、安全面もよく管理されている。

人参、一万トン以上、玉ねぎ 800 キロを一日で処理するという。

今は、北海道の野菜が主であるが、山口県野菜で対応できる仕組みに

何とかならないかと思ったのは私だけではないようである。

「地産地消」を推進し、コーディネートしていける人材があれば県内農業も活性化するはず。

架け橋となる「人」は？「部署」は？

やり方次第で、地方も活性化する道は必ずあるはず。

まして、障害を持っておられる方とも共に働く環境にある企業。

こんな企業が防府にもあればと思う。

ツイッターでつぶやく

2010年11月4日

有名人がツイッターなるものでつぶやいていることがニュースに取り上げられたりする。

最近では政治家もつぶやくようだ。

しかし、先週ツイッターではなく、直接聞いた二人の子どもを持つ父親のつぶやきは実感がこもっていた。

「私たちの代は、この職業でやっていかざるを得ない。厳しいけれども、もう方向転換はできない。しかし、今心配なのは、子ども二人が将来防府に帰って就職できるだろうか？後を継げとは言えないし、この防府に住んでもらいたいのだが。」

自営業の方であるが、ふっと宴席でつぶやかれた。

胸に響く、防府の現状のつぶやきである。

JT 防府工場の閉鎖のニュースが流れた日である。

きょう聞いた「つぶやき」

「会社の同僚が、山口市のアパートに住むという。子どもを二人抱えて、防府市よりも山口市の方が育てやすい。乳児医療費、保育料など違いすぎる。」子育て世代の女性からであるが、私自身、山口市に住むという話を聞いたのは今年になって5人目である。

現場は一生懸命努力している。懸命に暮らしを支えようとしている。働く世代も必死なのだ。

その「必死」さが何故伝わらないのか不思議である。「防府の財政はとても良い」と公言されていたから問題はないと思うが、もし万万が一予算がないのであれば、みんなが知恵を絞って「よりよくなるよう」力を合わせていくことで、現状の打開はできるのである。

「手をつなぐ」勇気が問われている。

遭難

2010年11月3日

「男女五人遭難」と昨夜の民法のニュース。崖にしがみつくような遭難者の姿を一瞬映して、コマーシャル。「遭難者を視聴率に使うなよ。」と思わず叫ぶ。その後、無事救助された姿を放送。

キャスターもコメンテーターも何も言わない。
平気なのか、感覚がすでにずれているのか、私にはわからない。

今、障害者と農業の自立支援に関わる二つのことで相談を受けている。
両方とも、民間活力で、相当数の雇用が見込まれる事業だ。
どうも、役所の姿勢でことが進展しないようだ。
法律がそうなのか、お役所仕事なのか、これも私にはわからない。

運用を変える、智慧工夫を結集することで、地域が活性化するのだ。
そこを支援して初めて「お役人」であろう。
むしろ、積極的にアイデアを出して民間を支えるのがこれからの官の姿。
本当に市民の役に立つ人こそ「お役人」である。

最近「わからない。」と答えることが増えてきたように自分でも思う。今までの常識が通用しない未知の感覚に政治・経済・暮らしは突入している。

しかし、日本が内輪もめ、内弁慶のスタイルを見せれば見せるほど、それを見逃してくれるほど世界は甘くない。防府のおかれている環境も同じではないのか。

市議会

2010年11月2日

先週、金曜日市議会が終了したのは午後7時を大きくまわっていたようだ。最近の防府市議会は、結構時間がかかるらしい。

そのわけを尋ねると、「議員の質問ごとに、答弁が不確定で休憩が入る。休憩を入れて執行部が協議し答弁書を読み上げるからいくらでも時間がかかる。」とのことであった。

大事なことは、いくら時間をかけてやってもよい。やらなければならない。しかし、答弁の準備不足であれば大変な時間と税金の浪費である。市職員にも残業手当が支給される。無論高熱水費もかかり、エコとも程遠い話だ。もし、国会中継で質問ごとに「休憩」「協議」があったなら、国民はどう思うのであろうか。そのような政府であればあつという間に信頼を失うだろう。

もし、本当にそういう状況であれば、やはり議会でのやり取りを「映像」で見たいと思う。

質問、答弁どちらに問題があるのか、市民に「仕分け」をさす。仕分けをさせるだけの情報をせめて公開すべきである。

傍聴席にいつも詰めかけるほど民間には時間がない。余裕もない。

東洋工業→マツダ

2010年11月1日

先日のブログに、マツダ防府工場誘致のエピソードを書いた。

ある方から、「本当にそうなのか？当時東洋工業であったと思うが誘致を決めた時の市長さんは鈴木さんなのか？」と、質問を受ける。

防府工場進出の決定は当時の東洋工業(マツダ)山崎芳樹社長、鈴木覚防府市長とでなされた。

操業開始が、1982年であるから、決定、工場建設、操業開始までかなりの年数はかかったはずである。

経済不況と議会や市民への説明、理解を得るために双方が大変なご苦労をされたとも聞いている。その苦しさがあったから、感極まっておられて、餅まきの後、涙の抱擁となったのであろう。

当時の市会議員さんは、こぞってマツダ車に車を買替え、誘致に協力されたこともおぼろげに覚えている。市の執行部と議会、そして市民が協力して大企業の防府誘致が決定した。

大きな夢・目標を掲げて、先人たちのような、市民のためになる「良い仕事」を望む。そのことが成って、「ああ良かった。これからまちは変わっていく。希望が持てる。」と思えることが、市のトップの仕事ではないのか。